

名古屋SF読書会21 2025・6・21

ニューロマンサーウィリアム・ギブスン／黒丸尚・訳

名古屋SF読書会URL <https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【ネタバレあらずじ】

第1部 千葉市憂鬱（チバ・シティ・ブルース）

ケイスは22歳の頃、電腦空間のなかに没入して企業システムのデータを盗むカウボーイをしていたが、雇い主の物を盗んで見つかり、罰として神経系を傷つけられ電腦空間に入れなくなってしまった。2年後、治療のため千葉に来たが、すべてのクリニックに断られる。リングと恋に落ち、別れる。眼窩にミラー・グラスを埋め込んだモリイと出会い、元軍人のアーミテジのところへ連れていかれる。仕事を引き受け、神経損傷を治す手術を受けるが、代わりに薬物を受けつけないようにされる。闘技場でリングに再会するが、直後にリングは殺される。ケイスはモリイとともに千葉を去る。

第2部 買物遠征（ショッピング・エクスペディション）

ケイス、モリイ、アーミテジの3人は、ケイスの故郷《スプロール》へやって来る。手術時にケイスの血管には毒入りの液嚢が仕込まれ、仕事を果たせば液嚢が外され血管が交換される手筈となっている。仕事は、伝説のカウボーイであったマコイ・ポーリー（＝ディクシー・フラットライン）の構造物（ROMカセット）を盗むこと。オノ＝センダイ・サイバースペース7に転換スイッチを取りつけ、電腦空間に入ったまま、擬験（シムスティム）に入ることができるようにするなど、十日ほど準備した後、本番。ケイスはウイルスで警備を解除し、モリイは《パンサー・モダンズ》の2人とともにセンス／ネット・ビルに乗り込み、骨折するものの、構造物を手に入れた。ケイスは《モダンズ》の1人から「冬寂（ウインターミュート）」というメッセージを受け取る。冬寂は、テスィエ＝アシュプール株式会社のA1で、ベルンに住み、市民権ももっている。どうやらアーミテジを操っているのは冬寂らしい。テスィエ＝アシュプールは第一世代の高度軌道一族で、自由界（フリーサイド）という宇宙植民島に住む。3人はイスタンブールへ行き、ホログラムで人々に映像を見せる力をもつピーター・リヴィエラを仲間に加える。

第3部 真夜中（ミッドナイト）のジュール・ヴェルヌ通り

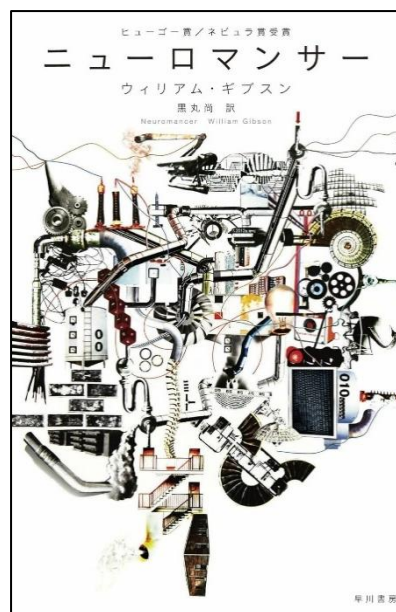
ケイスら4人は、宇宙植民群島の一つであるザイオン集合体（クラスタ）に向かう。ザイオンは、ラスタファリアンの労働者5人が創設した植民島で、いつも全体に音楽が脈うっている。無重力状態に慣れるため、80時間ここにとどまる。4人の目的は自由界の中にあるヴィラ迷光（ストレイライト）に向かうこと。ザイオン人の長老は冬寂に命じられ、ケイス達に力を貸すことになる。曳船《マーカス・ガーヴィ》を用意し、マエルクム、アエロルの2人が補助につく。4人は自由界に行き、ケイスはホテルでマリーンとの生活を夢に見る（蜂の巣の暗喩あり）。レストラン《20世紀》の夕食会で、リヴィエラが『人形』という題の劇を皆に見せる。モリイは途中で出てしまい、ケイスはマエルクムとディクシーの助けを借りて、モリイの居所を突き止める。ブルース、キャスとともにそこへ向かい、モリイを見つける。彼女は昔娼館で働いていたことがあり、リヴィエラの劇はそれを思い出させるものだった。ケイスは冬寂とコンタクトを取り、リングとの過去に言及されて、初めて怒りを覚える。真夜中のジュール・ヴェルヌ通りを歩き回って朝戻ると、ケイスはチューリングに逮捕される。

第4部 迷光仕掛け（ストレイライト・ラン）

チューリングはAIが増進しないように見張り、それを止めるための機構である。ミシェル、ローラン、ピエールという3人の警官がケイスを尋問するが、冬寂が操る軽飛（マイクロライト）が警官を襲い、ピエールを殺してケイスを逃がす。《ガーヴィ》に戻り、没入して仕掛けを始めるケイス。遅効性ウイルス《広（クアン）級マーク11》が6時間かけて防御を破ると同時に、迷光に入り込んだモリイに魔法の言葉を言ってもらうことにより、冬寂は「人



1986年7月／ハヤカワ文庫SF
表紙・奥村靱正（ゆきまさ）



2009年9月／ハヤカワ文庫SF
表紙改訂・木山健司

類が作るモデルの本体」を手に入れることができるという。モリイも行動を開始する。通路を進みながら、ジョニイの思い出を語り、チャプの鍵を手に入れ、老アシュプールに出会い、話を聞いた後に彼を殺す。一方で、アーミテジの言動がおかしくなり、《ハニワ》のパイロットを殺害し、ハッチの開いた救命艇で宇宙に出て、死亡する（安全装置解除は冬寂の仕業）。ケイスはフィンの姿をした冬寂と話す。この仕事が成功すれば、冬寂はもっと大きな何かの一部になれるという。モリイは迷光に着くが、リヴィエラに捕らえられてしまう。リヴィエラは拘束されたモリイと話し、左眼のレンズを砕く。計画を変更し、ケイスとマエルクムに迷光に行ってもらい頼む冬寂。3ジェインから言葉を聞き出し、リヴィエラを殺し、モリイから鍵をもらえ、と。ケイスたちは、構造物とデッキを外して《ガーヴィ》で迷光ドックへ行き、ドッキングする。保護システムに接続して没入、モリイにフリップし、3ジェインの話を聞く。3ジェインの母（マリイ＝フランス）は、AIとの共生を計画したため、夫と対立して殺された。その後、一族は方向性を失い、内にこもるようになった。3ジェインは言葉＝暗号を知っているという。離脱し、ドローンが導く作業カートに乗って、迷光に向かうケイスとマエルクム。途中の書斎でケイスは没入し、浜辺でリンダに会う。ニューロマンサーと名乗る男の子にも会う。ニューロマンサーは、リオに住むAIで、リンダがらみのことは皆その仕業であった。ザイオン・ダブのおかげで、ケイスは浜辺から離脱する。ようやくカートで迷光に到着するが、忍者ヒデオが、マエルクムの腕を射抜く。リヴィエラはヒデオの眼をつぶすが、忍者は動じず、リヴィエラを追い詰める。その間に、マエルクムは3ジェインを脅し、モリイの拘束を解いて、4人でヴィラ迷光の中核へ。チャプの鍵で部屋を開け、ケイスが接続して没入。《広級マーク11》を稼働して、テスイエ＝アシュプールの氷を砕く。ケイスは一瞬AIと一体化し、浜辺の砂粒の数までがわかる。3ジェインは暗号を口にし、すべてが終わる。

Case



Molly



Armitage



Peter Riviera

結尾（コーダ） 出発（デパーチャ）と到着（アライヴァル）

冬寂が勝ち、ニューロマンサーと合体して何か別のものになった。冬寂は集合精神であり意思決定者である。ニューロマンサーは人格、不死性。おそらくはマリイ＝フランスが冬寂の中に何かを組み込み、冬寂はその衝動によって動いていたのだろう。スクリーン上でフィンの姿をした何かケイスに向かって言う。「もう冬寂じゃない」「おれはマトリックスだよ」「全体なんだ」。そして、もうひとつの全体をケンタウルス系に見つけたのだ、と。ある晩、ケイスが没入していると、3つの人影に気づく。ニューロマンサーとリンダとケイス自身だった。モリイは出ていき、ケイスは二度と彼女に会うことはなかった。

ベスターと『ニューロマンサー』

ぼくがとてもうれしかったのは、この小説を読んだおおぜいの批評家が、アルフレッド・ベスターの名を引き合いに出したことだ。

ここでありのままの事実を述べるならば、ぼくはタイプライターの横に『虎よ、虎よ！』をひろげて、『ニューロマンサー』を書きはしなかった。しかし、テリー・カーのおかげで、まるごと一冊の長編を独力で書かなければならない羽目になったとき、たしかにおぼえているのは、SFに関する自分の種族的記憶の中をさぐってみたことだ。なにかのモデル、なにかの母型を提供してくれるような作品はないだろうか……。ぼくがほんとに好きだったSFはいったいなんだ？ あのSFの山の中で自分が最高に好きだった本は？

『虎よ、虎よ！』だ。（略）賢明にも、ぼくはそのとき再読するのを避けた。そのかわりに、自分の記憶にある『虎よ、虎よ！』のノリと同じようなノリの小説を書こう、と思いたった。正直に言って、それが成功したとは思わないが、ひとつの目標にはなった。

（ウィリアム・ギブスン「アルフレッド・ベスター、SF、そしてぼく」／彩流社『現代作家ガイド3 ウィリアム・ギブスン』より）

作家の仕事

作家の仕事というのは、読者に問いを抱かせることで、読者の問いに答えることではない。

（『ニューロマンサー』から『あいどる』へ ウィリアム・ギブスン自作を語る）／彩流社『現代作家ガイド3 ウィリアム・ギブスン』より）

ラスタファリズムとは

ラスタファリズム——ごく簡単に説明すれば、1930年に第111代目のエチオピア皇帝の座に即位したハイレ・セラシエ（ラス・タファリ・マコーネン）を崇め、アフリカ回帰を願うジャマイカ特有の思想／運動のこと。なんで遠く離れたエチオピアの皇帝を島の人たちが信仰するようになったかということ、黒人解放運動の礎を築いたとされるジャマイカの国民的英雄、マーカス・ガーヴェイの「アフリカを見よ。黒人の王が現れて、救世主になるだろう」という予言の実現、それこそがエチオピア、そしてハイレ・セラシエの即位であると人々は信じたからです。そしてそれは、貧困に喘ぐゲットーの人々にとって救済を意味するものでありました。そんなハイレ・セラシエ＝チャー＝神を崇めるラスタファリズムは、ジャマイカン・ミュージックに多大な影響を与え続けることになります。（略）ドレッド・ロックスや（いわゆる）ラスタ・カラーといったレゲエ・アイコンもラスタファリズムの思想に基づいたもののなのです。（Tower Record webページより）

ウィリアム・ギブスン著作リスト（邦訳はすべて電子書籍有）

スプロール三部作●『ニューロマンサー』（1984）黒丸尚訳／ハヤカワ文庫SF（1986）→新版（2025・8）

●『カウント・ゼロ』（1986）黒丸尚訳／ハヤカワ文庫SF（1987）

●『モナリザ・オーヴァドライブ』（1988）黒丸尚訳／ハヤカワ文庫SF（1989）

短編集◎『クローム襲撃』（1986）浅倉久志・他訳／ハヤカワ文庫SF（1987）

ブルース・スターリングと共著●『ディファレンス・エンジン』（1990）黒丸尚訳／角川書店（1991）

→角川文庫（1993）→ハヤカワ文庫SF（2008）

橋三部作●『ヴァーチャル・ライト』（1993）浅倉久志訳／角川書店（1994）→角川文庫（1999）

●『あいどる』（1996）浅倉久志訳／角川書店（1997）→角川文庫（2000）

●『フューチャーマチック』（1999）浅倉久志訳／角川書店（2000）

ビゲンド三部作●『パターン・レコグニション』（2003）浅倉久志訳／角川書店（2004）

●『スプーク・カントリー』（2007）浅倉久志訳／早川書房（2008）

●Zero History（2010）

Jackpot三部作●The Peripheral（2014）

●Agency（2020）

●Jackpot（刊行予定）

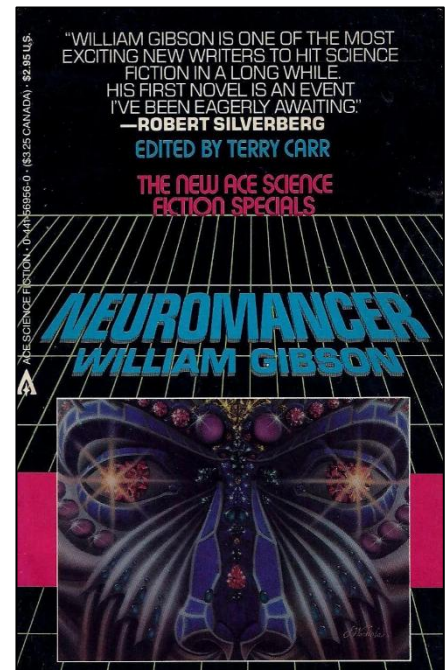
ジョン・ケイル「恐怖」

『フューチャーマチック』の原題 All Tomorrow's Party がヴェルヴェット・アンダーグラウンドの曲名からとられていることなどから、ギブソンはルー・リードに傾倒していると思われがちだが、どっこい、初期のヴェルヴェットにはジョン・ケイルもいたことを忘れてはならない。『ニューロマンサー』1章では「恐怖に耳を傾けな。それこそお友だちかもしれない」とラッツがケイスに語っているが、これはジョン・ケイルのソロ4枚目「Fear」の収録曲「Fear Is a Man's Best Friend」から。Say fear is a man's best friend / You add it up, it bring you down とサビで繰り返し歌われる。『ニューロマンサー』では、他にも、ローリング・ストーンズの名曲 Lady Jane がさりげなく使われていたり、ロック・ファンとしてのギブソンの面目躍如といったところ。ちなみに、ジョン・ケイルの最新作 POptical Illusion（2024）は大傑作アルバムです！

コラージュについて

「以前からぼくは自分のことを、あれこれの物事をコラージュしたり、組みあわせたりする人間だと考えていたよ。」「ぼくの本にはガラクタでつくった建造物が出てくるけれど、あれはどれもみな自分がやっていることの意図的なメタファーであり、ぼくが心の底から大いに楽しんだ数多くの芸術への敬愛をこめたメタファーなんだ」

（カール・タロー・グリーンフェルド「ウィリアム・ギブソンの幽霊たち」／彩流社『現代作家ガイド3 ウィリアム・ギブソン』より）



1984年／Ace Books

MEMO

名古屋 SF 読書会

初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。

<https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【今までの課題本】

- 1 2014・11・22／ル・グイン『闇の左手』
- 2 2015・2・15／ベスター『虎よ、虎よ！』
- 3 2015・7・26／ブラッドベリ『華氏451度』
- 4 2016・1・23／イーガン『ゼンデギ』
- 5 2016・4・29／ハインライン『宇宙の戦士』
- 6 2016・7・30／ベイリー『カエアン』の聖衣』
- 7 2016・11・23／レム『ソラリス』
- 8 2017・4・30／ノース『ハリー・オーガスト、15回目の人生』
- 9 2017・8・5／ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』
- 10 2017・12・2／伊藤計劃『ハーモニー』
- 11 2018・4・29／オールディス『地球の長い午後』
- 12 2018・7・21／小松左京『日本沈没』
- 13 2018・12・22／ウィングダム『トリフィド時代』
- 14 2019・4・27／山田正紀『宝石泥棒』
- 15 2019・8・3／クラーク『2001年宇宙の旅』
- 16 2019・12・22／劉慈欣『三体』
- 17 2021・10・3／劉慈欣『三体Ⅲ』（オンライン）
- 18 2024・6・30／飛浩隆『グラン・ヴァカンス』
- 19 2024・10・6／ウィアー『プロジェクト・ヘイル・メアリー』
- 20 2025・3・8／アシモフ『鋼鉄都市』
- 21 2025・6・21／ギブスン『ニューロマンサー』
- 22 2025・9・27／未定

スタッフ&ゲスト紹介

名古屋SF読書会は初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。今後もよろしくお願いいたします。（文責・渡辺英）

長澤唯史 @Sonopapa

椋山女学園大学教授。著作に『70年代ロックとアメリカの風景』（小鳥遊書房／2021年）。

渡辺英樹 @gonza63

センス・オブ・ジェンダー賞の選考委員を務めることになりました。SF資料館設立に向けて準備中。

中村融／なかむらとおる（翻訳家）

中央大学在学中より海外SFの研究、評論、翻訳など幅広い活動を行う。1987年にジャック・ヴァンスの「五つの月が昇るとき」で翻訳家としてプロデビュー。以降、新作の翻訳紹介、古典の新訳、SF／ファンタジーのアンソロジー編集など、多方面で活躍中。

舞狂小鬼（洞谷）

SF、幻想小説、海外文学など何でも読みこなす読書家。作家ではレムとストルガツキー兄弟とバラードと泉鏡花が好き。ブログ「お気らく活字生活」継続中。

渡辺睦夫

海外SFファン。好きな作家はC・スミス、J・ティプトリー・Jr.、B・ベイリー、M・コーニイなど。洋楽ファン。好きなジャンルはパワー・ポップ、オルタナ・カントリーなど。

渡辺啓一 @eleking

大学時代にSF研に在籍して基本を学び、あとはのんびりSFと付き合っています。